

いと断じ、張謇や梁啓超の例を上げて、彼等が最後まで清朝と立憲に執着したことを強調する（胡繩武・金冲及、論清末立憲運動、上海人民出版社、一九五九）が、筆者はこれをどう見るであろうか。

第四に、第三回請願運動失敗以降、張謇の指導する予備立憲公会是運動より脱落するが、何等の説明もない。これを黙殺してもよいのかどうか。以上幾つかの疑問を掲げてきたが、要はこの種の問題を、社会経済史的考察を全然ぬきにして、ただ上層部の政治的かけひきや、離合集散のみで解釈することが、いかに困難であるかを例証したものであるといえるであろう。そうはいっても別な側面を否認するわけではない。全般的に見て、大陸と台湾の問題設定、重点のおき方、理論構成には少なからぬ特徴があり、それぞれ関心を誘うことだけは確かであるが、何れがよく歴史の核心に迫るであろうか。

（台北、正中書局、一九六一、四三八頁）

窪 徳忠著

## 庚申信仰の研究

— 日中宗教交渉史 —

松 本 雅 明

一  
本書は、著者が十年の才月を費して、日本全国に残存する庚申信仰の実体をくまなくさぐり、文献を精査し、それが道教の三戸

信仰の受容であることを明かにしたものである。著者はすでに昭和三十一年に『庚申信仰』を出版したが、本書はその後の幅びろい調査によつてさらに補訂し、本文一一四九頁に及ぶ巨冊として刊行された。中国道教の日本受容という問題は、その初期を除いて、充分研究されたことはなかつたが、本書によつて、それは信仰・文献の両面から徹底的に追求整理された。中日の宗教交渉を考える上に、画期的な労作であるといふことができる。以下章を追つて内容を紹介しよう。

序章 庚申信仰の研究法について まず橋浦泰雄氏が『月ごとの祭で』のなかで、庚申祭はとくに関東と中部に盛んであるというのに駁し、十七世紀中葉以降、全国にほぼ均一の状態にあるとする。かくひろく行われた理由、庚申侍の意義や起源については、江戸時代の『四時堂其諺』『国朝佳節録』以来、多く道家（教）説にもとずくとされてきた。しかし昭和十年に柳田国男氏が「庚申の由来について拾芥抄以来、支那から輸入した学説が弘く行はれ、学問をした者だけは之を信じて居たが、實際その行事に携はる多数は其仲間では無く、彼等には又別途の感覚があつたことは、本書に現はれて居る外部の形相の、複雑を極めて居るのを見ても察せられるであらう」（農村信仰誌）としてから、民俗学者の間に日本固有信仰とみる説が有力になつた。窪氏はこの両説の不充分さを指摘し、それを解決するためには、日本における庚申信仰の時代的な変遷をとらえ、それを中国の三戸信仰の変遷と比較しなければならぬとする。

第一章 三戸説とその信仰 中国における三戸説は晉の葛洪の『抱朴子』が初出であり、その内容を、梁の陶弘景の『真誥』、唐の段成式の『酉陽雜俎』、梁丘子の『黃庭内景玉經注』、撰者不明の『沈中記』によつて考える。時代が下るとともに修飾附加が行われ、唐代にいたつて完成したとし、『道藏』二二〇冊を博搜した資料が詳しくあげられている。三戸の驅除法については、A 祈禳法(16)、B 服餌法(18)、C 符籙法(5)があつた。この信仰は初唐以後、道教々団のみならず、ひろく一般の信仰となつて中国社会に滲透した。

第二章 庚申信仰の実例 まず諸説をひき、ついで著者自身の具体的な実地調査例をあげる。山村の庚申信仰として徳島県美馬郡貞光町端山字広谷を例にひき、講の組織、講の日取り、頭屋、講の出席者、講の順序、雑談、御利益と神の屬性、禁忌、伝承について述べる。平地農村の信仰については、奈良県磯城郡大三輪町大泉出屋敷を、漁村では青森県北津軽郡小泊村大山長浪、中小都市では山形県飽海郡遊佐町六日町、大都會では東京都練馬区北町三丁目(旧下田柄)、家単位のものとしては福井県三方郡美浜町麻生をひき、いずれもその内容を詳説する。

第三章 庚申信仰の現状 今までの調査結果の類別がころみられ、本書のもつとも重要な部分を形成する。著者がカメラと録音機をかついで、寒暑をいとわず十年にわたつて全国を調査して歩いた結果の綜合で、十一項目三〇〇頁にわたつている。それは庚申侍の称呼、庚申講の組織、ヤドと日取り、崇拜対象、供物、

勤行と祭祀、徹夜の習俗と伝承、庚申神の屬性と利益、禁忌と習俗、縁起話、修験道と庚申信仰で、まさに庚申百科全書である。

## 二

第四章 庚申縁起とその成立 著者は庚申日本起源説を論破するために、「古代中世において閑人の遊びのごとくなりさがつてゐる」といわれる守庚申と、「江戸時代に農民の中に生きていた」といわれる庚申講(庚申侍)とが本質的に相違するか否かを検討する。そこで、平安末から室町中葉にかけて日本庚申信仰の所依の經典となつていた庚申經(老子守庚申求長生經)の成立について考え、それが「雲笈七籤」所収の「紫微宮降太上三戸法」、「太上三戸中經」、「五行紫文除尸虫法」、「厭尸虫方」、「庚申夜祝尸虫法」、「急效仙方」所収の「老君三屍經纂」、また「孫真人備急千金要方」、「医心方」卷七所引の「病源論」、「太上除三尸九虫保生經」などによつて構成されていることを明かにする。現存本はすこぶる道教的であるが、園城寺伝記本よりみて、もとは仏教色をもつ部分もあつたことが知られる。しかも道藏等に全くみえず、「園城寺伝記」所収文の末尾に、智証大師円珍の「深秘之説」とあることなどから、これは十一世紀の日本撰述で、著者は円珍の法灯をひく加持祈禱の儀であろう。当時の庚申は三戸説による中国的なもので、書面金剛法は一方では三戸説と結びつきながら、他方では伝尸病治療の加持祈禱法として、独自の面目を保つていた。室町時代に入つて変化がおこり、庚申講の組織と庚申經が出現したことが、庚申塔における「結衆」によつて知られる(この場合著者

は、庚申塔にみえる人名を多く僧尼名とし、それは守庚申から庚申待への過渡を示すとすべく、これらの僧尼名と思われるものは、室町期の板碑等の石造物の銘に見られるように、領主や村落の男女が、自ら法名をつけて逆修したものに他ならないであろう。しかし人名の多寡、形式等によつて領主的なもの、村落的なものとは判別されると思うので、著者のいう過渡的な現象は、ここにも容易によりみとられるであろう。つぎに『庚申縁起』を分析し、その中に平安朝以降の習俗や信仰、三戸説や『守庚申経』などの説が、仏教的に変容されながら取り入れられていることを明かにし、それが室町中葉における天王寺の僧による著作であると推定する。

第五章 日本における庚申信仰の変遷 今までの資料を整理し、起源と変遷について述べる。それは八世紀の後半に伝わり、平安朝には宮中および宮廷貴族における庚申の行事、庚申信仰となり、鎌倉時代に及ぶ。室町になると、「宮中や宮廷貴族間の庚申信仰がさかんで、しきりに御庚申や守庚申が行われる一方、庚申因縁記などの庚申縁起が成立して、一般の人々の間に講の結合による庚申信仰がめばえた上に、青面金剛が庚申さんとしての位置を獲得する傾向がしだいにつよくなつた」(五七二頁)。江戸時代には庚申待が庶民化し、複雑多岐化し、また地方色をおびてゆく過程がみられ、ことに後半期にはそれが甚しくなる。神道との習合は江戸初期以前にはなく、万治元年に山崎闇斎によつて説かれた庚申猿田彦説(大和小学)にはじまる。

批評と紹介 松本

第六章 庚申信仰と三戸信仰 平安初期に伝来した三戸説は、はじめ仏説と混じていたために、仏説として受けとられたが、他方『老子三戸経』によつて老子の教と見る人もあつた。それは平安貴族の年中行事、加持祈禱の習俗と結びついて、医者である僧侶が撰取したが、室町中期になり、日本村落における夜籠りの祭りに結びついて、庚申待の習俗としてひろがつた。室町末以降は修験道とも結びつき、育成され普及したと思われる。最後の「むすびに代えて」において、著者は以上の結論をもつて、従来の民俗学者の日本起源説を批判し、庚申こそ道教の日本の受容に外ならぬと説く。論旨はきわめて鋭く、通説を論破してあますところがない。

附章の「庚申塔と塚」、附録の「庚申年譜」「庚申縁起集」「三戸表」はいずれも長文の力作で、研究の基礎的な資料を提供している。年表にはすべて出典とその原文が附されている。

### 三

以上、本書の内容を概説したが、複雑多岐にわたる論旨を、簡単に紹介することは不可能にちかひ。ここには、庚申を中心に、道教の日本受容がいかなる過程でなされたかが、きわめて明快に実証されている。著者の多年の努力がここに報いられたことを深くよこびたい。今後の庚申研究は、著者のこの資料の集大成によつて、飛躍的に前進するとともに、単に民俗学的な生まやかしい思いつきでは、研究が不可能になつてきたことが知られる。そこで最後に、私は著者に向つて一つの希望を申し述べたい。

それは今後も著者がこの研究を続けられるなら、次の二つの点を明かにし、それによつて庚申受容の実体を社会史的に実証してもらいたいと思うことである。

(1) 第一に、平安末以来、日本の村落にはさまざまな信仰が受け入れられたが、その中において、庚申信仰はいかなる位置を占めたか、ということである。すなわち村落における薬師・観音・釈迦・阿弥陀・毘沙門・不動・地藏・虚空蔵・弁才天・権現・天神・祇園・山王・妙見・天照大神・金比羅・恵比須・秋葉・稻荷などの祭祀と、いかなる関係にあるか。社会的機能、信仰、受容の時代、における相違と共通性、或いは相互の関係を、著者から明かにしてもらいたいと思う。それによつて庚申信仰の特徴が、一そうきわだつてくるにちがいないからである。

(2) つぎに前者と密接にからむのであるが、日本の村落の信仰は、古くから村落社会の統合のシムボルで、寺院やお堂も「氏寺」にはかならなかつた。しかし村落が近世になつて膨脹し發展すると、いくつかの組にわかれる。するとこれらの小村が、また統合のシムボルとして祭祀をもつ。各組がみな石地藏のこともあれば、組ごとに異なることもあつて、分裂の時期の遅速を示している。そこから、古い荘園を母体とした祭祀、村の祭祀、小村(組)の祭祀となり、三重の社会的結合が、三重の祭祀を生むのがふつうである。庚申信仰はこのような村に、如何にして受容されたのであろうか。

中世から近世にかけて變動の烈しかった社会に、新宗教である

禅宗・法華宗・浄土宗・浄土真宗などが入つてゆく。ことに浄土真宗はそうである。私のいる九州中部を例にとるなら、南北朝・戦国の動乱、近世領主の数度の移封・交替、有明海の広大な干拓などによつて、中世的秩序や伝統が破壊されたところに、真宗が激しい勢いで入つてきている。それは真宗が村落共同体を無視し、氏寺とならず、家単位・個人単位にひろがるからである。それに対して、中世的領主と秩序が敵存した薩摩や相良藩では、真宗を切支丹と同じく禁止し、中世村落の崩壊を防ぎとめようとした。庚申信仰が宮廷から村落に流入するとき、それはまずどのような社会にはいり、近世でもどのような社会に根をおろしたのであろうか。またどのような社会がその流入を拒んだのであろうか。日本全国の調査は不可能にちがひと思われるので、典型的な幾つかの地域でその点を調査し、解明されたら、非常に興味ふかいことであり、村落社会の分析に、宗教の側から新しい光をあてられることになると思われる。著者の今までの調査に新例が追加されるよりも、新しい方向をきりひらいてゆかれることを切望する次第である。

(東京、日本學術振興會、一九六一年、本文一一四九頁、索引一四頁)